



●特集●

第63回大会レポート (松山東雲女子大学・松山東雲短期大学)

「今を生きる子どもと社会」というテーマをめぐり熱い議論が各会場で展開した今大会。今回の特集では、改めて議論を振り返ることによって、そこから、新たな実践と研究が生まれることを期待したい。

第63回大会を終えて

第63回大会実行委員会委員長 児島 雅典

日本保育学会第63回大会は5月22日と23日の両日、四国の愛媛県松山市の松山東雲女子大学・松山東雲短期大学キャンパスにて開催されました。

本学は地方の小さな大学であり、交通の便があまりよくありませんし、また十分な施設・設備も整っていません。そのため日本保育学会のような大きな会の開催に向けての不安（口頭発表や自主シンポジウムの件数制限）は当初からありました。しかしながら日本保育学会の丁寧なお勧めとご協力、そして本学学長の強い賛同と大勢の教員の理解により開催を決断しました。地方の小さな大学としてできるだけのことをしようという思いでした。

大会テーマは「今を生きる子どもと社会」いろいろな思いを込めたテーマでしたが、日本の未来を背負う子どもたちの健やかな育ちを願ってのことでした。

大会記念講演は、宮台真司氏（首都大学東京教授）にお願いしました。先生にはすぐに受諾していただき感謝しております。お忙しい中にもかかわらず大会の趣旨を踏まえたと話をいただきました。会場いっぱい集まった会員の皆様には大変好評でした。

大会実行委員会の事業としては、国際交流委員会・OMEF日本委員会との共催シンポジウムの実施、そして「保育の質を高める記録のあり方を考える」「遊びの豊かさをめぐって一保育のあり方を考える」「子どもにとって特別支援教育とは一保幼小の連携を考える」をテーマとしたシンポジウムや特別講演や対談などを実施しました。どの会場も予想を超える人が集まり喜んでおります。

研究発表では口頭発表155件、ポスター発表534件、ビデオ実践研究発表3件、自主シンポジウム15件でした。多くの発表申し込みに感謝しております。本学は十分な施設・設備が整っていないため、口頭発表と自主シンポジウムでは件数制限をさせていただきました。会員の皆様にはご不便をおかけすることとなりましたことをお詫び申し上げます。

参加者は2058名でした。地方の大会としては大きな催しとなりました。参加された多くの会員と地元の保育関係者に感謝です。また、学会事務局の方や運営に携わった本学教職員、そして学生などのご協力にも感謝です。規模の小さい地方の大学での学会開催に、多少の不安もありましたが、終わってみると、小さいからこそできた学会であったのではないかと考えております。

前日は霧のため飛行機が松山空港に着陸できずに大混乱をきたしました。それでも会長の秋田先生をはじめ大勢の役員の方のご理解と協力により4時間ほど遅れましたが、無事に理事・評議員会を済ませることができました。お疲れのはずなのにどなたの口からも「当日でなくて良かったですね」とあたたかい言葉をいただきました。

参加者の感想をいくつか紹介します。「天候には恵まれませんでしたがとても心のなごむ印象に残る大会でした」「大勢の参加者ですね。体育館をはじめほとんどの会場に活気がありました」「どの会場もいっぱいでした」「現場の要望に応えようとする意図が読み取れる内容が多く満足できました」「どの会場もこやかでいいいな対応の学生さんがおられ、とても気持ちよく過ごすことができました」「お花がすてきでした。さりげない心遣いに東雲らしさを感じました」などです。

どれもうれしい感想です。会場の狭さがプラスに働いたのではないかと思います。ですが反省点も多くありました。日常の勤務をしながらの準備でしたので、電話やメールでの対応に不都合が多かったこと。また、会場への交通の問題でも大変ご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

以上、無事に終えたことをご報告し、皆様方のご協力に感謝申し上げます。ありがとうございました。

実行委員会企画シンポジウムⅠ 保育の質を高める記録のあり方を考える

磯部 裕子

保育という臨床をどのように読み取るか

日本保育学会第63回大会 実行委員会企画シンポジウムⅠは、「保育の質を高める記録のあり方を考える」をテーマに有意義な議論が進められた。会場を埋め尽くす多くの出席者数から鑑みても、本テーマが、保育に関わる多くの会員にとって、「今」まさに目の前にある課題（あるいは研究テーマ）に迫るための、重要なアプローチであることを意味しているといえる。まずは、それぞれの話題提供者の提案内容を簡単に報告する。

河邊貴子氏は、遊びを深く理解するようになるにつれて、記録の質が変容することを自身の保育者時代の記録をもとに明らかにされた。保育者の成長と共に記録もまた成長し、当時はそのようにしか書くことの出来ない自分と、そのように記された保育の見方や遊びの理解の仕方に「気づくこと」もまた記録することの意味であるとした上で、保育全体を俯瞰し、遊びと空間の関係を捉え、次なる保育を構想する方法として、「保育マップ型記録」など、新たな記録の可能性を提起された。

渡辺英則氏は、日々自園の保育を見守る園長の立場から多忙な実践の場において、「記録」が「記録」とどまらず、意味を生成していくための一事例として、園便りやクラス便りの中に保育の具体的記録を盛り込んでいくという自園の取り組みを紹介された。保育の具体が記録された「たより」によって、保護者が園の保育を具体的に理解し、それが保護者と保育者との関係を紡ぎ出すことにつながり、結果として園の保育が充実する様を示された。

最後に、秋田喜代美氏は、実践の場において、記録観を柔軟にとらえることの必要性を述べた上で、保育の質が高まる記録の一つとして、映像記録の意味についての見解を示された。映像記録は、多様な実践の表象から課題を導き出し、保育者同士の対話を生むツールにもなるとして、SICSのアプローチにみられるような「プロセスに焦点をあてた映像記録」の可能性を提案された。

以上、3氏の提案は、それぞれに興味深いアプローチであった。保育を記録することは、保育という臨床をどのように読み解くかということに直結する作業である。それがどのような形であれ、保育の「記録」には、多様で個別具体的な臨床の物語が記されている。そして、その物語を多面的な視座をもって読み解くこ

とで、保育者（あるいは研究者）自身が、保育という営みを構造的に理解することができる。この循環する作業のプロセスの中で、保育という臨床の物語は、本当の姿を立ち現すのではないだろうか。

「記録」すること、そしてそれを読み解くというテーマは、保育という臨床の場に身を置き、実践する者、研究する者双方にとって、保育という営為を理解するためにも、極めて重大な課題であることを再認識するシンポジウムであった。参加者の多くが、それぞれの職場に戻って今手元にある多くの「記録」を読み返していることだろう。私自身がそうであったように。

●Profile

磯部 裕子 (いそべ ひろこ)

宮城学院女子大学児童教育学科 教授

主たる研究テーマは、保育におけるカリキュラム論。環境論。これらのテーマを実践者と協同しながら検証しつつ、研究の小さな歩みを進めている。

実行委員会企画シンポジウムⅢ 遊びの豊かさをめぐって

佐々木 晃

プレーパーク（中川奈緒美氏）、子育て広場（井出美恵子氏）、幼稚園（和田万希子氏）における実践の話題提供は、大変熱く魅力的でした。そして、確かに「地域の中で、子どもたちの遊びが守られ、息づいている」ことが実感できました。

3人の実践者たちは、それぞれ、子どもたちの「遊び」を守るために、行政や地域の大人たちとの折衝や連携に努めたり、保護者たちの心を解きほぐしつつ、ネットワークをつなげていったり、「遊び」の効用を「学び」と関係づけて説明し、大人たちに説明しながら守り伝えたりと、まさに獅子奮迅の働きです。敬服いたしました。

私自身、幼稚園現場を離れ、昨年より教育行政の立場から、地域における子育ての支援や教員の資質向上のための研修等にかかわっておりますので、これらの取り組みの重要さと困難さに共感するところが多くありました。

一方で、大人たちに守られた「遊び」に対するかすかな違和感も感じないではありません。「野生動物に会うために、動物園に行く」という、矛盾したロジックは「遊び」にも当てはまってしまう。

それほどまでに、「遊び」が追いつめられた状況にあるということでしょう。ゲーム配信や機器、TV番組キャラクターに関連した玩具等は別として、大人に益して、経済効果を産まない「遊び」を守ることは勿論、「遊び」を復権させ、子どもたちの文化に返してあげ

る責任を痛感しながらシンポジウムに参加していました。

話題提供と戸田雅美氏、新澤拓治氏の指定討論に代えて、フロアー（佐々木宏子 鳴門教育大学名誉教授）から、次のような問題提起がありました。「それぞれがかかわっている活動の中で、『財』として、子どもたちの世代間に伝わっている『遊び』はどれくらいあるのか？」ということです。「遊び」にも様々ありますが、私たちの取り組みを評価する観点は、「遊び」が子どもたちにとっての「宝」、つまり「財」となり得たかというところではないでしょうか。

本当に「遊び」が子どもたちの手に戻り、自分たちの文化の中で醸造されたなら、それは形を変えながら「財」として伝承され、また、新たな「遊び」の温床となっていくの难道うと感じました。

この温床の下に子どもたちが遊び浸り、豊かな幼児期を保障されるまでには、社会の仕組みや暮らし、学校等の制度など、さまざまな問題について考え、みんなで改善に取り組んでいかなければなりません。

しかしながら、この遠大な挑戦の先鋒として、「今、ここにある子どもの遊び」とそれを守らんとする大人達の強靱な態度を示したことは、大きな意味があったと思います。私なりに何ができるか、私の立場なら何をすべきかを自問しつつ帰路につきました。相馬靖明氏の企画してくださった、このテーマを継続して議論し続け、大きなうねりとなりますことを願っています。

●Profile

佐々木 晃（ささき あきら）
徳島県立総合教育センター 学校経営支援課義務教育担当指導主事
研究テーマ「幼稚園教員の資質向上」「教員のライフステージに応じた研修内容や方法の開発」「幼・小連携」

特別講演Ⅱ 遊び保育を再考する

野口 隆子

日本保育学会第63回大会に参加致しました。初めて訪れた松山は短時間の滞在となりましたが、たくさんの興味深い研究・発表等に出会い、有意義な時間を過ごすことができました。大会1日目小川博久氏の特別講演Ⅱ「遊び保育を再考する」にうかがいました。講演の概要について感想とともにご報告させていただきます。

講演の冒頭でまず子どもが群れて遊ばなくなった今日の日本において、学校教育の場では学力差が広がり優劣がつくことで仲間関係が損なわれ、子ども時代を共に過ごすという人生にとって大事な経験が失われているのではないかと指摘されました。キャサリン・ル

イス氏が比較文化的視点から日本の教育について良いところとして述べた、例えば当番活動や集団参加への動機づけ、学び合いなど、子どもたちにとって楽しい場としての学校が失われているのではないだろうか。地域で群れて遊ぶ経験や自然発生的な異年齢の関わりがない場合、広々とした場で遊んでも次々に遊びがうつりかわり、遊びの性質も変化していく。生活の中で実態がなく、スローガンとして遊びが大事といわれているのではないだろうか、今の時代に遊びとはどのようなものが必要なのかという問題提起をされました。

そして保育者の遊びに対する役割の中で、先生が遊び方を教えるというより室内で例えば製作でおもしろいものを先生が作り出すその様子がまずあり、子どもが大好きな先生のやることを“見て学び、みようみまねで試行錯誤で学ぶ”側面があること、また子ども一人ひとりとの応答的な関係を基礎としながら、集としての子どもの見る際に先生と視線があうことで大事に思われているという意識が子どもに芽生え、室内で保育者が子どもとの関わりの中で作るネットワークとリズムができてこそ広がりをもった園庭での関係性にいきてくる、と述べられていました。

小川氏が「ぜひ議論をしたい」と話されていたのが印象的でした。非常に早いスピードで変化していく子どもを取り巻く社会・環境において、保育や教育をどのように考えていくかを議論し、子どもの経験や遊びの質を丁寧にとらえ、共有する必要性について述べられていました。

私はふと複数の先生方が話されていたことを思い出しました。先生ご自身が気付かなかった無意識の言葉・口調を子どもたちがまね、とりいれて振舞っている姿をみて「○○ちゃんは私のこんなところも見ていたんだな、気をつけないといけないなと思いました」とおっしゃっていました。保育者側が意図したこととは異なる、生活の中での“見る・見られる”関係の在り様と子どもの目から見た先生の存在の大きさについてあらためて考える機会となりました。

また、様々な地域や園の持つ文化、環境が異なっている中で、各園の先生方が共に保育を省察し創造的な議論をおこない、実践につなげ、その実践を見あい学び合うことで保育の質を高めていく協働の姿勢が反映されるようにも感じました。

●Profile

野口 隆子（のぐち たかこ）
十文字学園女子大学人間生活学部児童幼児教育学科 准教授
保育者養成の実習担当一員として学生指導をする中、私自身も様々なことを学んでいると感じます。研究テーマは、幼児期の仲間関係、保育における実践の構築、メンタリングに関心を持って取り組んでいます。

保育臨床相談システム検討委員会企画シンポジウム 園と地域の専門家が協働して 保育の質を高めていくには

中山 智哉

保育臨床相談システム検討委員会企画シンポジウムは、「園と地域の専門家が協働して保育の質を高めていくには」というテーマであった。

はじめに野本氏から、横浜市で行われている保育者研究会の活動報告がなされ、保育者がグループワークを通じて、保育に対する省察を深め、自身の保育を見直していくことが、保育の質を高めるためには重要であるとの見解が示された。なかでも印象深かったのは「保育者が自分のことばで子どもの姿を語れるようになることが大切である」との指摘であった。これは保育者が子どもを理解する際に、安易に診断名や行動特徴などで理解するのではなく、遊びや生活の中で一人ひとりの子どもの姿を読み取ることの大切さを示したものであった。また外部の専門家のあり方として、保育者の目線で子どもを語る、保育者のことばで子どもの姿や保育を深めるための示唆を促すことの重要性などが話された。

次に、帆足氏より医師としての立場から、自らが主催している保育研究会の活動についての報告がなされた。保育研究会においては、参加者の信頼関係を深めながら、受容的な関係を作ることが大切であり、そうした雰囲気の中で率直な議論を展開できることが、保育者が学びを深め成長につながるとの見解が示された。また、保育研究会をより学びの深いものにしていくために、キーパーソンとしてのコーディネーター（保育を熟知した外部の専門家）の重要性が示され、どのような人材をどのように発掘するかなどの具体的な提案もなされた。

最後に大豆生田氏が、外部の専門家と保育者の協働について、園内研修などに関与してきた立場から報告した。保育の質を高めるためには、保育者の主体的な振り返り作業が必要であるとの見解を示し、外部の専門家は、そのための環境として保育者同士が語り合える場をコーディネートしていく役割を取れるのではないかと提案がなされた。また外部の専門家が、生活の文脈の中で子どもの姿を考えると保育者の専門性を大切に、子どもの問題について共に考えるという「対話スタンス」を持つことが必要との見解が示された。

指定討論では、増田氏が話題提供者の意見を踏まえながら、それぞれの専門家が主体性を持って語り

合い、そして互いの主体性を認めることの大切さについて言及し、そうした対話を通して保育者が変容していくことが、保育の質の向上につながるとの指摘がなされた。また、園長に求められる役割についても触れ、一人ひとりの保育を大切にする場をどのように形成するか、またそれをどのように継続していくかといった組織作りについての見解も示された。

質疑応答では、園長の役割についてなどの質問がフロアから出された。時間的な制約もあり、議論が深まるまではいかなかったが、参加者の関心の高さが窺えた。

近年、保育現場は子どもや保護者とのかかわりの中で、様々な難しさを抱えている。そうした中で、外部の専門家との有機的な連携を図り、いかに保育の質を向上させていくかは重要な課題といえる。今回のシンポジウムはそうした課題を検討していく上で、とても示唆に富んだものであったように思われる。

●Profile

中山 智哉（なかやま ともや）
九州女子短期大学初等教育科 講師
専門は臨床心理学、児童福祉。現在の関心は、保育現場における保護者支援について。保護者と関係形成や支援を効果的に行うための要因を明らかにする研究を進めている。また、保育者支援を考える上で、感情労働としての保育に着目している。

自主シンポジウム 15

「そこにピアノがあるから」ですか

難波 純子

本シンポジウムのサブテーマは「子どもたちの表現を支えるために」である。まず、企画・司会の今川恭子氏から、現在ほとんどの保育室に当たり前のようになっているピアノであるが、「なぜピアノなのか」この問いについて、4名のシンポジストと指定討論の今村方子氏による、実践と研究双方の観点から、「子どもと共にどう向き合い音楽表現をつくるのか考えていきましょう」という主題が提起された。

現在私自身は、幼稚園において日々、子どもたちの表現生活に寄り添いながら過ごす一方で、大学において学生のピアノレッスンを個別にサポートするという保育者養成の一端にも携わっており、保育の場と養成校の実際の両側面から非常に関心の高いテーマとして参加した。

まず、嶋田由美氏から「保育現場における風琴（オルガン）と洋琴（ピアノ）の歴史」という話題提供があった。歴史的に見て、明治以来の保育や教育の場における鍵盤楽器使用については、儀式を支え

たり、唱歌教育の導入によって集団での指導に便利な楽器として重要な役割を果たしてきた。しかし、現在の保育の中でのピアノは、合図や子どもを動かすための大人視点の都合になっている場面に出会うこともあるという、疑問点も投げかけられた。私自身も、かつては保育者主導で、まさにそこにピアノがあるから、合図代わりの便利な道具として使用していたことを省みた。

現役幼稚園教諭の久留島太郎氏からは、「ピアノが弾けない保育者として生きる私の音楽人生」という話題提供があった。ご自身は、ピアノにこだわらず自分のできる方法で、音を楽しむことを子どもたちに伝えようとの考えで、ギターを表現手段として保育の中で活用されているそうである。確かに、実際子どもと向き合い、反応を見ながらピアノを弾くことができるようになるには、それなりの訓練や経験が必要である。このことから、子どもたちの表現を支えるために保育を展開するには、必ずしもピアノが全てではないと言えるであろう。

その理由は、志民一成氏による「ウクレレの効用」という話題にも繋がってくる。第一の特徴として、ギターに比べて更に小型で可搬性があるので、演奏しながら移動することも可能であるし、何より子どもに向き合って共に歌い合えるという長所がある。また、ウクレレ伴奏とピアノ伴奏時の歌声の違いや、相性について具体的に示され、伴奏の仕方によって子どもの声に大きく関わってくるということが実証され、大変興味深かった。

話題提供の総括として、水戸博道氏からピアノの使用にあたっては、「環境」「音楽様式」「役割・目的」を明確化しておくことが課題であると述べられた。そして、保育者養成校としては、ピアノを使って楽譜通りに弾くことで精一杯になりがちであるが、たとえ初心者の学生であっても、子どもからひき出したい声を考えた弾き方を伝える必要性が示唆された。

保育の場において子どもと共に伝え合う表現を支えるために、ピアノが独り歩きすることのないよう、楽器使用の意味を深く考えさせられる契機となった。

●Profile

難波 純子 (なんば じゅんこ)
兵庫教育大学大学院学校教育研究科 修士課程修了
兵庫教育大学附属幼稚園 非常勤講師
梅花女子大学心理こども学部 ピアノ・アシスタント
幼児の生活における主体的な表現活動にとって、ふさわしい理論と実践の構築をめざして研究中です。